

## 犬の舌に発生した顆粒細胞腫の組織学的および免疫組織学的検索

二瓶和美<sup>1),3)</sup>、鈴木 聡<sup>2)</sup>、吉田桂子<sup>3)</sup>、内田和幸<sup>2)</sup>、中山裕之<sup>2)</sup>、小野健一郎<sup>1)</sup>  
1) 日本動物高度医療センター、2) 東京大学、3) サンリツセルコバ検査センター

**【背景・目的】**顆粒細胞腫 (Granular cell tumor; GCT) は由来不明の比較的稀な腫瘍であり、腫瘍細胞の細胞質に特徴的な好酸性顆粒が認められる。本腫瘍は動物では犬の舌や馬の肺に好発する。その由来については、人では横紋筋、神経、線維芽細胞、未分化間葉細胞などの由来が提唱されていたが、近年の研究の結果、シュワン細胞由来説が支持されている。犬の舌に発生する GCT についても、同様に神経系、筋系および組織球系マーカーに陽性を示す症例が報告され、その特徴は人の GCT と類似していると思われる。本研究ではイヌの舌の GCT の詳細な性状解明を目的に、組織学的・免疫組織化学的検討を行った。**【材料と方法】**犬の舌腫瘍で HE 染色により顆粒細胞腫と診断した 8 例について、PAS 染色、アルシアンブルー染色(pH2.5)および免疫染色 (Vimentin、S100、GFAP、NF、NGFR、Melan A、クロモグラニン A) を実施した。**【結果と考察】**病理組織学的には 8 症例中 2 症例で、腫瘍細胞の細胞質顆粒が淡褐色～茶色を示す細胞が少数認められた。PAS 染色には 7 例が弱陽性で、アルシアンブルーには 1 症例が弱陽性であった。免疫染色では全ての症例で vimentin に強陽性、S100 に弱陽性であり、その他の抗体には全て陰性であった。今回検索した犬の舌における顆粒細胞腫瘍 8 例の PAS 染色、vimentin および S100 抗体に対する染色結果は、過去の報告とほぼ一致しており、その起源としてシュワン細胞などの神経堤由来が示唆された。S100 蛋白はメラノサイトにも含まれ、GCT が口腔内に好発し、今回 8 例中 2 症例では、細胞質内顆粒に茶色顆粒が認められた事から、その由来としてシュワン細胞に加え、メラノサイト由来の可能性も考えられる。今後、腫瘍細胞の由来の決定には培養細胞系を確立して詳細に検討する必要があると思われる。